

エッセイ部門最優秀作品

福岡市中央区 江島さま

父との思い出

父には子どものころ、鈍行列車で博多までよく連れて行ってもらった。

博多の街は、私にとって新鮮で刺激的で、恐怖だった。

博多駅駅舎の大きさ。往来を行き交う人々。店先にこぼれるように置いてあったたくさんの帽子。足音を立てないようにそっと近づいた境内の荘厳な雰囲気。「妖怪が住んでいる」と父に驚かされた巨大な木。飾り山の武士が私を守ってくれる、と言われた。

川端商店街は特に活気に溢れていた。威勢のいい店主の声は怖くて目が合わせられなかった。迷子にならないよう、父の手をしっかりと握り締めて歩いた。

一方で表通りから少し離れると、自分のいる時代とは違う、ずっと昔の世界が残っているのだなということが、子どもながらに分かった。どこか別の空間に迷い込んだ気がした。

ところで、私の一番の楽しみは父と食べるぜんざいだった。歩き疲れた頃、父と一つの椀に入ったぜんざいを分け合う。

いつの間にか、このことが博多へ行く時の、私たちの約束事みたいになっていた。喜んで博多へお供したのは正直なところぜんざいが目当てだった気もする。

仕事の忙しい父と向き合うことが少なかったが、振り返ると、「博多へのお出かけ」は父と娘のかけがえのない時間となった。

その父も昨年、亡くなった。気付いたときには、ガンが脳をはじめ全身をむしばんでいた。意識が戻ったり戻らなかつたりを繰り返す病床では、反抗期の思い出ばかりが、後悔の念と一緒に思い出された。父に申し訳ない気持ちで、胸が張り裂けそうになる時もあった。

それでも救いとなったのは、博多の街とぜんざい屋での、小さな秘密のデートの思い出があることだった。

照れ屋で、特に母の前では笑顔を見せない父。向かい合った席で「お父さんと食べるぜんざいおいしいね」とほほ笑むと、恥ずかしげもなく、相手を崩す父の幸せそうな姿が、今もまぶたに焼き付いている。その時は少し驚いたが、父を裏切るような気がして、母には、なぜか秘密にしていた。

博多に着いたのだな、と感慨深くなった駅舎も、もうなくなった。それでも父を思い起こすとき、博多で小旅行を楽しんだ時の、若かった父がいる。

8歳の息子と5歳の娘。子どもたちは新しい駅と博多の街に、どういう記憶を刻んでゆくのだろう。

作ろうとしてできるものではない、忘れられない遠い思い出。それでも、いつか記憶を共有し、子供たちの思い出作りの手伝いができればいいな。子供の手をつなぎ、先を歩く夫たちの背中姿をみながらそう思った。